

氏名	こん どう とも こ 近 藤 智 子
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 169 号
学位授与の日付	平 成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 言 語 学 専 攻
学位論文題目	現 代 ア ラ ビ ア 語 に お け る 過 去 の 時 間 表 現 の 研 究 ——語りのテキストを用いた動詞および能動分詞の機能研究——

論文調査委員 (主査) 教授 庄垣内 正弘 教授 佐藤 昭裕 教授 吉田 和彦

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代標準アラビア語において過去の事象表現に用いられる動詞および能動分詞を対象とし、その意味・機能を分析するものである。アラビア語においては動詞の機能負担が大きく、特に動詞のテンス・アスペクトの研究は従来から多く研究がなされているにもかかわらず、まだ十分な記述や分析ができていない。本論文が過去の事象に限定したのは、そこで用いられる形式間に意味の重複が見られ、従来、それらは同じ意味を表すとされてきたためである。取り上げる動詞は、過去時制・完了相を表す“完了形”，*qad*+“完了形”，*kâna*+“完了形”，*kâna*+*qad*+“完了形”と、過去時制・未完了相を表す *kâna*+“未完了形”と“未完了形”である。一方、能動分詞はテンスを表さないが、過去時を表す補助動詞と組みあわさった *kâna*+能動分詞という形で完了や継続を表すので、動詞と意味・機能が類似している。さらに、上にあげた各動詞形式は複数の否定形をもつが、それらの違いも、従来の研究でほとんど言及されてこなかった。

本論文の目的の1つは、これらの動詞形式および能動分詞のふるまいを詳細に記述、分析することによって、それぞれの固有の意味・機能を明らかにすることである。

分析方法として、主節、従属節、テキストの3つのレベルに分けて、各形式の機能を分析する。テンス・アスペクト・モダリティは動詞の文法範疇であるから、主節レベルで表す意味を各形式の基本的意味と仮定する。主節レベルでは、時間副詞との共起関係や語彙アスペクトとの関わりを中心に分析し、従属節レベルとテキストレベルでは、主節や先行文脈など他の事象との時間的關係や論理関係をもとに分析する。また、各レベルで頻出／稀出環境を調べる。各レベルでえた結果を比較し、どのレベルの機能が顕著か確認する。

本論文のもう1つの目的は、文内部の情報構造や談話における情報処理過程の点から動詞の機能を分析することである。従来のアプローチは、既に出てきたものとしてテキストを扱い、頻度や出現環境を統計的に調べるといった静的な分析が中心であった。情報処理過程の分析は、動的であり、情報の受け取り手が事物や事象をどのように認識するかを考察するものである。

第1章は、上記のように、論文の対象や目的、アプローチについて簡単に説明した。

第2章では、本論の分析に関わる概念であるテンス・アスペクトの定義を示した。従来の Comrie (1976) による「事象を外／内から見る」という曖昧な定義ではなく、Klein (1994) の定義を取り入れ、テンス・アスペクトの定義をより明白にした。Klein に従い、テンスは、話者が事象に関して話題に取り上げるトピックタイム (TT) と発話時 (TU) の位置関係であり、アスペクトは事象時 (Time of Situation (TSit)) とトピックタイム (TT) の関係であると定める。完了相は、語の意味に固有の終点がない事象の場合は  $TSit \subseteq TT$ 、固有の終点がある場合は TT がその終点を含む関係で表される。一方、未完了相は  $TSit \supset TT$  で表される。2章後半では、先行研究にあげられた“完了形”と“未完了形”の用法を分析し、現代標準アラビア語の動詞体系がテンス体系であることを示した。また、動詞の複合形式は、[モダリティ [絶対テンス [相対テンス [アスペクト [語彙アスペクト]]]] という順序で構成され、しかも、左側の要素が右側の要素の意味に作用

するという点で、左の要素が、より上位にある階層構造をなしていることを示した。

第3章では、標準アラビア語の動詞句と能動分詞の語彙／事象アスペクト分類を行なった。事象構造のより普遍的な分類をめざし、事象を構成する境界点の数やその性質（語の意味に固有か否か）、始点と終点間部分の有無やその性質に基づいて分析した。また、その他に、事象本体の始点・終点の前後を含めた部分が事象間の関係解釈に関わることから、事象構造を前段階—始点—発展段階—本体—結果状態—終点—後段階からなるとする。これに基づき標準アラビア語の語彙アスペクトタイプを、State (Permanent, Temporary), Inchoative State, Activity, Inchoative Activity, Accomplishment, Inchoative Accomplishment, Achievement, Semelfactive の8タイプに分類した。“完了形”，“未完了形”，能動分詞は、これらの事象のどの部分を見るかを表す視点アスペクトであり、語彙アスペクトタイプごとに、どのような意味を表すか示した。これにより、従来、同一視されていた動詞と能動分詞の意味・機能の違いを明らかにすることができた。

第4章では、過去時制・完了相を表す“完了形”と qad+“完了形”の違いを分析した。文レベルでの分析は先行研究で多くなされ、qad+“完了形”の機能は現在完了または話者の確信表明としているが、全ての機能を含んだものではない。本論文では、データ分析から qad+“完了形”が頻出／稀出する構文があり、それらが“完了形”の頻出／稀出環境とほぼ相補分布をなしていることがわかり、そこから qad+“完了形”の機能を考察した。これらの頻出／稀出環境は文レベルでは完全に説明できないが、テキストレベルでえた結果を適用することによって説明が可能になった。テキストレベルの分析では、qad+“完了形”は、常に先行文脈の存在を前提とし、そこに現れていたトピックではない参加者の1つに視点を転換して情報を付加するもので、語りの始めや結びなどによく見られる。またこの機能は、他言語における現在完了の「局面転換」や、Current Relevance などの語用論的機能と同じ機能をもつものであることを明らかにした。これにより、qad+“完了形”がトピックコメント文のコメント部分や、条件文の後件、反事実条件文の前件などに頻出することが説明され、同時に、時間副詞節や関係節に稀出であることも部分的に説明できる。また、各レベルの機能の比較から、qad+“完了形”は、テキストレベルの機能が顕著であると判明した。

第5章で扱った kâna+qad+“完了形”／kâna+“完了形”は、従来、英語の過去完了に相当するものとして説明されてきたが、用いられる環境が大きく異なる。時間指示の点では、他の過去の事象に対する時間的先行性を表すので、英語の過去完了と同じである。しかし、テキストレベルの分析では、英語の過去完了が先行事象の背景的状况を表すのに対し、標準アラビア語の kâna+qad+“完了形”／kâna+“完了形”は、後続事象の背景的状况を表すことが明らかになった。その一方で、先行事象との意味的・論理的結びつきは、基本的にない。このことから、先行研究が、qad+“完了形”と kâna+qad+“完了形”／kâna+“完了形”をともに先行文の付帯状况を表すものとして扱ってきたことは不適切であることを示した。また、kâna+“完了形”は、従来 kâna+qad+“完了形”と同じ機能をもつとみなされ、ほとんど研究されていない。しかし、時間副詞との共起や他の事象との関係から、大過去 (past-in-the-past) を表し、結果状態を含意しないことが明らかになった。結果状態は、それをうち消す表現がない限り存続できるので、kâna+qad+“完了形”は現在を表す時間表現と共起できる。kâna+“完了形”の方は結果を含意しないので現在の時間表現と共起しない。

また、これらの複合形の補助動詞 kâna は、単に過去時を表すのではなく、先行文で確立された過去のある特定時を前方照応したり、kâna の直後に後続する名詞をトピックとして提示する機能をもつことを明らかにした。

kâna+(qad)+“完了形”の否定形として、kâna+lām+“未完了形要求法”と lām+yakun+(qad)+“完了形”の2つが用いられる。前者は descriptive negation に用いられ、また、kâna によるトピック提示機能がある。一方、後者は、他の陳述に対する否認に用いられるので、両形式の使用される分布が異なる。

第6章では kâna+“未完了形”の機能を分析した。標準アラビア語の従属節では、未完了相の事象は相対テンスで表されるので、主節と同時の事象を表す関係節や名詞節には“未完了形”が用いられ、相対的過去の事象には kâna+“未完了形”が用いられる。しかし、関係節や名詞節においては、kâna+“未完了形”が主節事象と同時を表す場合がある。関係節の場合、動詞形式の選択には先行詞の形式上の限定性と、意味上の定性（あるいは聞き手にとっての新／旧情報の別）が関与する。先行詞が形式的に限定で、意味的に不定（新情報）の場合は、関係節の機能は、意味的に不定の先行詞を特定化し制限する機能をもつので、主節との結びつきが強く相対テンスが使われる。一方、先行詞が形式的に限定され意味的に定（旧情報）である場合は、関係節は先行詞を特定化する必要がなく、情報を付加するだけなので、主節からの独立性が強く、絶対

テンスが用いられる。

また、kâna+“未完了形”には3つの否定形がある。形式間の意味の違いは、語彙アスペクトと結びついた意味の違いや、補助動詞 kâna のトピック提示機能の有無が関わる。kâna+lâ+“未完了形”は、事象の性質を表しトピック提示機能をもつ。mâ+kâna+“未完了形”は、kâna+“未完了形”で表される事象が、過去のどの時点においても存在しないことを表すので、習慣や強い否定を表す。lam+yakun+“未完了形”は、通常、継続や反復の否定を表し、トピック提示機能をもたない。

第7章では、“完了形”の否定形として用いられる lam+“未完了形要求法”と mâ+“完了形”の意味・機能の違いを考察した。lam+“未完了形要求法”の否定辞 lam は後続の動詞(句)を否定し、mâ+“完了形”の否定辞 mâ の方は、文中の構成素、とくに名詞を動詞より優先的に否定する。lam+“未完了形要求法”は、過去のある時点においてある事象が生じなかったことを表したり、事象の非生起に伴う結果状態の継続を含意する。一方、mâ+“完了形”は統語的に名詞を優先的に否定し、意味的には名詞が表す事物の存在を否定する。名詞が表す事物は事象を構成する要素であるから、すでに談話に導入されている定の事物でない限り、その存在が否定される。それによって事象自身の存在が否定され、結果として mâ+“完了形”は事象の非存在を表す。特定時における事象の非生起を表すのではないから、テンスに関して特定されていない。そのため、時間副詞節に用いられない。mâ+“完了形”は、過去から発話現在までのすべての時点における事象の非存在を表すので、発話時と結び付けられて「～したことがない」と解釈される。ただし、事象の非存在の解釈には名詞の定性や常識が関与する。

また、lam+“未完了形要求法”/mâ+“完了形”が、後ろに従属節 Hattâ+“完了形”(意味は「～した時まで」)を伴う場合、意味の違いが顕著に現われる。lam+“未完了形要求法”と組み合わさる場合は、「～するまで—ない」という否定の継続状態の解釈になり、mâ+“完了形”と組み合わさる場合は、「—するや否や～した」という肯定の動態的解釈になる。両者の解釈の違いには、主節が表す否定された事象と反対の肯定的な事象への含意の強さが関与する。含意の強さは、事象の非存在を表す mâ+“完了形”の場合が強い。

第8章では、情報構造を語順と名詞の定性から考察した。動詞が補助動詞 kâna を伴う場合、3通りの主語位置が可能であるが、位置によって文の機能が異なる。kâna+動詞に後続する場合は出来事を叙述する機能をもつ。kâna と動詞の間や、kâna+動詞の前位置では、主語名詞をトピックとし後続内容がその性質や関連する出来事としてコメントされる。ただし、不定名詞は kâna+動詞の前には位置しない。また、主語名詞の定性の有無や主語位置によって、文の他の部分が全く同じでも、情報上適格な文と不適格な文が生じる。さらに、動詞 kâna は、後続の定名詞をトピック提示する機能をもつ。不定名詞が kâna に後続する場合は、kâna は不定名詞が表す事物の存在を表すことによって、その事物を談話に導入する。この時、kâna に後続する動詞が“完了形”ならば、kâna と後続の動詞は意味的に複合しない。従来、kâna に動詞が後続する場合、複合形と見るか否かの議論があったが、主語名詞の位置と定性から複合的な意味にならない場合を特定した。

第9章では、談話を情報処理過程として記述するのにどのようなモデルを用いて表すかという試みである。テキストの適格性は、従来あげられていた指示・省略・代入・接続詞などによる結束性に依存するだけでは不十分である。情報処理過程を記述するには、談話への事象の導入順序、事象間の時間的な関係と論理的な関係、用いられる動詞形式、事象を構成する事物の定性、トピックとその転換、主節事象と従属節事象の区別、出来事と状態の区別などが必要で、樹形図を用いて表記を試みた。従来の2次元的な図は、事象間の時間関係は明確に示せても、他の要素は視角的にまたは、構造的に示せず、情報処理過程を扱うには不十分である。また、各動詞形式の樹形図の考察を通じて、qad+“完了形”と kâna+qad+“完了形”の違いや、種類の違う状態の連続などの談話における構造を示した。また、従来言われていたように、談話で継起的出来事となるのは固有の終点のある事象にとどまらず、Activity などの動詞句も、継起的事象を構成できることを示した。談話では、固有の終点がない事象も、他の事象を談話へ導入することによって、視点が変わり、結果として終点が与えられたのと同じ効果を生ずる。ただし、樹形図のモデルはまだ不十分で、今後の検討が必要である。

第10章では、条件文における動詞の機能を詳しく考察した。従来は、条件文にはもっぱら“完了形”が用いられたが、テンスを表さないで、事象の時間解釈は文脈に依存するとされてきた。しかし、データ分析から、標準アラビア語では、複合形の使用によって条件文内でテンスを表示している事実を示した。kâna+qad+“完了形”は過去時を表し、kâna+sa—

“未完了形”は未来時を表すのに用いられる。また kâna+“未完了形”は継続や可能性、性質など、静態的な事象を表すのに用いられる。これらの形式の使用により、従来、条件文の動詞はテンスを表さないといわれていたが、現代標準アラビア語の条件文では、テンスが明示的に表わされる。その結果、前件節と後件節の動詞形式から、2つの事象の時間関係が示されることがある。

以上、過去の事象を表す動詞と能動分詞について、従来検討されていなかったふるまいを詳しく観察し、その意味・機能进行分析した。

## 論文審査の結果の要旨

アラビア語は動詞構造の複雑な言語である。とりわけテンス・アスペクトの扱いはむずかしく、これまで多くの研究がなされてきたが、明快な記述は提出されていない。

論者は本論文において、現代標準アラビア語のとりわけ過去時制を表す形式を取り上げてその振る舞いについて記述している。

第1章「序論」においては、研究対象、目的、分析についての論者の基本的な姿勢を説明している。論者は動詞のテンス・アスペクトを体系全体ではなく、過去時制形に限って考察している。その理由は、過去時制形の意味機能には一見して重複があり、先行研究ではその意味の重複が分析されなかったが、意味重複の背後に語用論的な違いの存在が予想できること、また過去時制形の分析には語りのテキストのもつ構造を利用しやすいことによる。分析の手順として、まず分析レベルを主節・従属節・テキストの3つに分類する。次ぎにテンス・アスペクトの主節レベルの意味を基本としたうえで、従属節やテキストレベルでの動詞の意味機能进行分析し、さらに、テキストレベルで得られた動詞の意味機能を再度文レベルに適用するという方法を採用している。

第2章と第3章では、これまでに研究されてきたテンス・アスペクトの定義を解説・批判し、第4章以降の分析に用いるための論者の定義を明示している。また語彙アスペクトの分析については、普遍的な事象構造を示し、その構造に基づいて理論的に考えられるアスペクトタイプを提示している。また、動詞や能動分詞などの文法範疇が表すアスペクトが、それぞれ、事象のアスペクトのどの部分を捉えているかも明示した。そして、それらに基づいて標準アラビア語における動詞と能動分詞があらわすアスペクトを8つに分類して詳しく分析し、従来同一視されてきた動詞と能動分詞の意味の相違を明確にした。

第4章では、過去時制・完了相を表す“完了形”と、qad+“完了形”の意味機能の違いを論じている。従来はqad+“完了形”の機能を、現在完了、もしくは、話者の確信を表すモダリティ機能を持つものとしてきたが、論者はそのいずれでも説明できない例をまず提示した。次ぎに、qad+“完了形”が頻出または、稀出の環境を文レベルで調査し、“完了形”がその環境において、qad+“完了形”とはほぼ相補分布をなすことから、それらの環境を分析することでqad+“完了形”の機能を“完了形”と区別できると考えたが、この点は特筆すべきである。また文レベルの分析では両形式間の違いに曖昧さが残るが、それを語りのテキストを用いたテキストレベルにより、qad+“完了形”が、常に先行文脈の存在を前提とし、先行文脈の事象の参与者のうち中心的な参与者から別の参与者や参与者の別の側面に視点を転換して情報を提示する機能のあることを明確にし、この機能から文レベルにおけるqad+“完了形”の頻出環境や稀出環境を説明することに成功した。

第5章では kâna+qad+“完了形”の機能进行分析している。これらは文レベルにおいては従来指摘されていたように時間的な先行性を表す。しかし、論者は小説や新聞記事などに現れる語りのテキストを用いた分析により、これらの形式が後続する文と何らかの因果関係を持つことを明らかにした。これは従来の研究には見られない新しい分析結果といえる。また、kâna+qad+“完了形”と kâna+“完了形”の違いを明示したことや、これらの形式の否定形の違いを分析したことも新しいことである。

第6章では kâna+“未完了形”の機能について分析した。これが特に関係節に用いられる場合には“未完了形”と選択的な関係があるが、その選択条件については明らかにされていなかった。論者はこの選択が、先行詞の形式上の限定性と意味上の定性によって決定されることを示した。また kâna+“未完了形”の否定形として用いられる3つの形式の意味機能の違いを語彙アスペクトやトピック提示機能から明らかにしている。

第7章では“完了形”の否定形として用いられる、lam+“未完了形要求法”と、mâ+“完了形”の意味機能の違いを論じている。この2つの形式の違いについては、多くの先行研究が見られるが、各形式の振る舞いを包括的に説明したものはない。論者は、それぞれの否定辞が作用する統語的な違いに着目してこの意味機能の違いを詳細に記述した。基本的に否定辞 lam は後続の動詞句を否定するので、過去のある特定時における事象の非生起を表すこと、一方、否定辞 mâ は、文中の名詞を動詞より優先的に否定し、名詞の表す事物を否定することを明らかにした。さらに、否定辞 mâ+“完了形”は、時間的な特定性が欠如していることを指摘し、lam+“未完了形要求法”と mâ+“完了形”の意味の違いが現れる構文を取り上げて、否定辞の否定のスコープの違いからうまくその意味の違いを説明している。

第8章では、個々の過去時制形の従来の分析をふまえて、テンスと語順および主語名詞の定性と、文の情報上の適格性について論じている。また、先の章にふれた補助動詞 kâna の機能についても詳しく論じている。語順と主語名詞の定性が文の情報上の適格性に関与することを指摘した研究はこれまでに見られないもので独創的といえる。

第9章は、談話を処理過程として分析したものであり、文における意味機能やテキストにおける分布や機能の分析とは異なるタイプの分析を試みている。ここでは、談話におけるテンス・アスペクトの表記に樹形図を用いて、談話への文の導入順序、各事象の時間的・論理的関係、名詞の定性、文のトピックの表示とその転換、状態と出来事の事象との区別、主節事象と従属節事象との区別などの表示を試みている。また、部分的ではあるが、不適格な談話や、標準アラビア語と英語との事象連続の適格性の判断の異なりについても説明している。

第10章では、条件文における過去時制形を扱っている。条件文において用いられるのは“完了形”であり、時間解釈は文脈によりなされるとする従来の説に対して、論者は動詞の複合形の使用によってテンスを明示するという新見解を提出した。これまでの研究は、条件文以外の環境で用いられる複合形の機能から、条件文での機能を類推した記述にとどまっていたが、論者は“完了形”が用いられる場合と複合形が用いられる場合とのそれぞれの要件を明示した。また、従来あまり論じられていない条件文における kâna+“未完了形”の機能や、後件節における補助動詞 kâna の機能についても新しい分析結果を出している。

論者の記述は、全10章、A4版、256頁に及ぶもので、言語学の論文としては大量といえる。先行研究を十分に理解し、それを大きく発展させた記述内容がこの分野に与える影響は大きいと言える。すくなくとも現代標準アラビア語の過去時間表現にかんする研究は今後本論文を避けては行えないといって過言ではない。とはいうものの、論者の記述にはなお不完全なところもみられる。たとえば、第9章の内容とそれに先行する各章の内容との関連には不明確な点もある。また第10章が他の章ほど精緻な記述でない点も気にかかる。しかし、これらの欠陥は本論文の価値を大きく低下させるものではなく、早期の改善が見込まれる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2001年1月12日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。